

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：32610

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02183

研究課題名(和文) ニーチェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで

研究課題名(英文) Reexamination of Nietzsche's Scientism and Antiscientism through a Comparison with Schopenhauer

研究代表者

齋藤 智志 (Saitoh, Satoshi)

杏林大学・外国語学部・教授

研究者番号：70442019

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ニーチェ哲学を、彼の先駆者にして批判対象でもあるショーペンハウアーと対比しつつ科学主義の視点から統合的に解釈することでニーチェ解釈を刷新し、可謬的な科学の営みが哲学に対して持つ意義と、「絶対的真理」と化してしまう科学の陥穽とを複眼的に精査する視点を得ることを目指してきた。その結果として本研究は、ニーチェの科学主義と反科学主義を価値・自然・芸術という3つの領域において精査する方向へと収斂してゆき、自然の領域におけるニーチェ哲学と科学主義の親和性の相対的高さ、および芸術の領域における両者の親和性の相対的低さを明らかにするに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英米圏では「ニーチェと自然主義」というテーマが注目を集め、ニーチェ哲学と科学の関係が問い直されているし、それは、自然科学が飛躍的發展を遂げた19世紀の学問状況を背景としながら思索したニーチェを理解する上で根本的な事柄に属するが、その解釈は今のところ全く定まっていない。だが、ニーチェの思索領域を価値・自然・芸術の3つに分類した上で、各領域におけるニーチェと科学主義の関係を精査した本研究の成果は、今後同問題を探求する上で欠くことのできない視座を提供したはずである。また、この問題の解明を「ショーペンハウアーと自然科学」というテーマと接合させたことも、従来の研究の弱点を埋める本研究の大きな意義である。

研究成果の概要(英文)：This study aimed at the following two matters; (1) to renovate Nietzsche interpretation by interpreting Nietzsche's philosophy from a viewpoint of the scientism consistently, comparing Nietzsche with Schopenhauer, who was Nietzsche's pioneer and criticism target; (2) to obtain a viewpoint to investigate from various aspects the significance that the working of science, which is fallible, has for philosophy and a pitfall of science that can become "the absolute truth". As a result, this study converged to the direction toward investigating Nietzsche's scientism and antiscientism in three fields, namely value, nature and the art. In the end, it came to clarify a relatively high affinity between Nietzsche's philosophy and scientism in the field of nature, and a relatively low affinity between the two in the field of the art.

研究分野：哲学

キーワード：ニーチェ ショーペンハウアー 科学主義 反科学主義

研究成果報告内容ファイル (アップロードファイル)

1. 研究開始当初の背景

現在、英米圏のニーチェ研究では、〈ニーチェと自然主義〉というテーマが注目を集め、反科学主義者でも、進化論を哲学に〈応用〉した危険な社会ダーウィニストでもないニーチェの哲学と科学との関係が問い直されている (例えば Brian Leiter, *Nietzsche on Morality*)。そこでは、自然科学が飛躍的發展を遂げた 19 世紀のドイツという文脈のなかにニーチェを位置づける試み (これは 20 世紀後半以降のニーチェ専門研究の成果の一つである) と、心の哲学やメタ倫理学といった現代哲学の問題系のなかでニーチェを捉える試みとが共振しており、その反響は広範囲に及ぶ。約言すれば、ニーチェの科学主義的側面が再評価されているのだ。それは反科学主義的 (ポストモダン) と科学主義的 (分析哲学) の対立という現代哲学の構図の反映でもある。

科学 (Wissenschaft) との関係は、近現代のほとんどの哲学者と同様、ニーチェを理解する上でも根本的な事柄に属するが、その解釈は今のところまったく定まっていな。一例を挙げれば、ニーチェが哲学の別名として構想した著作名 “Die fröhliche Wissenschaft” をどう訳すのかは、専門家の間でも見解が割れている。近年同書の新訳を上梓した村井則夫は、ニーチェの反科学主義を重視して「知恵」と訳したが (『喜ばしき知恵』、河出文庫、2012 年)、この書から哲学による科学の基礎づけという伝統的な〈第一哲学〉の構想を汲みとり、「学 (問)」と訳す研究者も少なくない (須藤訓任や森一郎など)。これに対して本研究グループは、ニーチェの科学主義的側面に定位し、そこに哲学と科学の連続性を見出し、ニーチェにとって哲学とは科学であると考えがゆえに、あえて「科学」と訳すべきだと主張したいと考えた。この「科学」の中心的発想は、〈われわれは絶対的認識には到達できず、常に《仮説》しか手に入れることができない〉ということ、換言すれば、われわれの認識はつねに経験によって反証される可能性を持つ、という可謬主義である。それがニーチェの標榜した「実験哲学」——それは「価値転換」という倫理的な意味を帯び、また芸術創造をモデルとするというニーチェ固有の美学的特徴を具えてもいる——の核なのではないか、と本研究グループは考えた。

ところで、こうしたニーチェ哲学に対するショーペンハウアーの影響は、きわめて低く見積もられてきた。ショーペンハウアーはニーチェにとって古い形而上学の代表者であり、そのペシミズムもろとも新しい科学の知見によって打倒すべき〈敵〉だったと見なされてきたからだ。つまり〈反科学主義者〉ショーペンハウアーがニーチェに及ぼした影響が大きいはずはない、というわけである。だが、それは本当なのか、という問題意識を本研究グループは持っていた。近年著しく進歩したショーペンハウアー研究が示唆しているのはむしろ、同時代の生理学などを積極的に取り入れるニーチェ哲学の姿勢そのものがショーペンハウアーに由来するという可能性ではないか。若きショーペンハウアーは、ゲッティンゲン大学の医学部で、黎明期にあった生理学など当時の最先端の自然科学を吸収し、それをシェリングやヘーゲルらの観念論と対決する際の強力な武器として用いた。実はショーペンハウアーは、反科学主義的観念論と科学主義的唯物論が対立する状況のただなかにいたのである。

本研究グループは、ショーペンハウアーの科学に対するこうした態度と半世紀後のニーチェのそれとを比較することによって、ニーチェの科学主義が有する過去の哲学との連続性と革新性の両面を明らかにしてゆきたいと考えた。そして、この作業は同時に、反科学主義と科学主義の対立をどう理解し、いかに乗り越えるかという現代哲学の課題と取り組むことでもあった。

2. 研究の目的

以上のような問題状況をふまえ、本研究では自然科学に親和的なニーチェの科学主義的態度を再検討しようとした。具体的には彼の哲学における 4 つの主要概念である「権力への意志」、「超人」、「芸術の生理学」、「永遠回帰」に的を絞り、それらをショーペンハウアー哲学と対比させつつ、科学主義的視点から整合的に解釈することを目指した。各概念の科学主義的側面と反科学主義的側面、およびそれに対応するショーペンハウアーの概念をまとめると以下の通りである。

	科学主義的側面	反科学主義的側面	対応するショーペンハウアーの概念
権力への意志	➤ 科学の営みをモデルとする可謬主義的認識論	➤ 自然の根底に存する形而上学的原理という面	生への意志
超人	➤ 進化論的背景 ➤ 歴史的・社会的側面	➤ 文化・宗教的背景 ➤ 主意主義的側面	聖人
芸術の生理学	➤ 美的体験の身体的・生理学的事実への還元	➤ 「ディオニュソス的なもの」という形而上学的領域設定	イデアの観照 = 意志の滅却としての芸術
永遠回帰	➤ 可謬主義という有限性の肯定	➤ 世界観 (全体性の希求) という側面	意志の否定

「権力への意志」は、科学的認識の本性が対象の支配・コントロールにあるということの一つのモデルとしているが、その一方で、自然の根源力のような形而上学的原理に関する主張と理解することもできる。

「超人」は、人間が進化する先に想定されている存在と捉えることができる一方で、決断による人間の実存的な自己変容を表現しているとしばしば解釈されてきた。

後期ニーチェの美学における主要概念である「芸術の生理学」は、美的体験が身体的・生理学的事実へと還元できることを主張していると解釈しうる一方で、「ディオニュソスのなもの」という初期以来の形而上学的領域設定の名残を残しているようにも理解できる。

「永遠回帰」は、可謬的であらざるをえない人間の有限性をそのまま肯定する思想であるが、その一方で、世界〈全体〉に関する主張として世界観のない形而上学的なものとして解釈されるのが一般的である。

かくして、本研究は具体的な狙いを以下の3点に定めた。

- (1) ここで挙げられている〈反科学的側面〉を科学主義的解釈のなかに整合的に位置づける。
- (2) 対応するショーペンハウアーの諸概念との比較を通じてニーチェの独自性を際立たせる。
- (3) 現代哲学的問題系に対してニーチェやショーペンハウアーの視点から新たな光をあてる。

3. 研究の方法

まず、テーマごとに下記のコアメンバーでワーキンググループを構成し、それを議論のスターティング・ユニットとした。

権力への意志	超人	芸術の生理学	永遠回帰
岡村俊史	関塚正嗣	山本恵子	齋藤智志
伊藤貴雄	鈴木克成	高橋陽一郎	竹内綱史
本郷朝香	上野山晃弘	五郎丸仁美	梅田孝太

その後、以下の研究会で全体での研究活動を行い、研究目的に資する成果を蓄積し、第4回研究会で全体を総括した。コアメンバーによる研究活動の具体的な内容は、個人研究発表、研究構想発表、ワークショップ（ショーペンハウアーとニーチェのテキストの綿密な読解）であり、加えて第4回研究会では森一郎氏（東北大学）による講演会「学問と生——戦いを生きるということ」も開催した。付言すると、第2回研究会時にむつ市市民講座として「ショーペンハウアー vs ニーチェ——意志の否定か、意志の肯定か？」と題した発表を行い、国民への研究成果の発信に努めた。

2017年度	第1回研究会（2017年8月）	諏訪東京理科大学
2018年度	第2回研究会（2018年8月）	青森中央学院大学
2019年度	第3回研究会（2019年8月）	龍谷大学（梅田キャンパス）
	第4回研究会（2020年2月）	杏林大学（井の頭キャンパス）

さらに、以下の日本ショーペンハウアー協会・ニーチェセミナー時に意見交換の場を設けるとともに、第30回セミナー時には、本研究と日本ショーペンハウアー協会・ニーチェ部会との共催で、井頭昌彦氏（一橋大学）を講師に招き、「自然科学について」と題したワークショップを開催した。

2017年度	第27回ニーチェセミナー（2017年4月）	大学セミナーハウス（八王子）
	第28回ニーチェセミナー（2017年11月）	杏林大学（井の頭キャンパス）
2018年度	第29回ニーチェセミナー（2018年5月）	大学セミナーハウス（八王子）
	第30回ニーチェセミナー（2018年12月）	帝京大学（八王子キャンパス）
2019年度	第31回ニーチェセミナー（2019年5月）	大学セミナーハウス（八王子）
	第32回ニーチェセミナー（2019年12月）	龍谷大学（深草キャンパス）

4. 研究成果

「3. 研究の方法」に記したように、当初は4つのテーマに分けて研究をスタートしたが、研究・議論が深まるにつれて、アプローチの視点が「自然」「価値」「芸術」の3領域に修正・整理されていった。すなわち、ニーチェと（反）科学主義との複層的な関係を解明するためには、多様なファクターが叩き込まれている上記4テーマに準拠するよりも、この3領域を枠組みとした方が有効性が高いとの見方に議論が収束していったのである。したがって、この3領域ごとに得られた成果をまとめたい。

(1) 「自然」は〈科学主義者としてのニーチェ〉の可能性が最も強く読み込める領域であることが明らかとなった。メンバー間で合意が見られたのは、ニーチェにおいては、その仮象主義・構成主義にもかかわらず、科学的知が真理たりうるということが放棄されていない、という点であ

った。この調停の方途の可能性は、以下の3つに集約された。

①初期ニーチェの「生成」としての自然理解が、彼の可謬主義的科学理解（可謬性と仮説性を科学の本質とする理解）の前提であり、それは後期まで一貫している。つまりニーチェも科学も、ともに確固たる「存在」を究明しているのではなく、「生成」としての自然を理解しようとしているのである。

②あらゆる論証的認識は、すなわち自然科学的知もニーチェの哲学的営為も、矛盾律に従っているが、それは「命法」として働く。すなわち、矛盾律によって対象一般の在り方そのものが定立され、それによって初めて真とみなされるべきものが決定される、換言すれば、論証的認識の対象としての世界（仮象界）が開かれる。この意味で矛盾律は実在を支配する手段であり、仮象は支配（生）にとつての有用性という点から真とみなされる。

③ニーチェの徹底した仮象主義によれば、支配としての認識の発動とともに支配される自然が立ち現れ、それとともに結果として支配する主体が立ち上がるのであり、したがって仮象としての自然の発見は不正性の肯定として永続的に繰り返される。一方トーマス・クーンは、科学を累積的成果の積み上げによる真実性の解明の営みとは見ず、科学的真理は実践を通じて暫定的・近似的に「くまくゆく（算定＝支配可能である）」という仕方では立ち上がる、とする。この両者の考えは整合的・親和的である。

(2)「価値」の領域における科学主義の問題は、価値概念の「自然化」という形で顕在化する。ニーチェは「あらゆる価値の価値転換」を標榜するが、価値転換（Umwertung）とは再（um）価値評価ということであり、あらためて評価し直されるべきは道徳的価値（ショーペンハウアーやキリスト教が説いたとニーチェが見なす共苦道徳的価値）であった。そして、価値の高さが絶対的・無条件的に受け入れられてきた道徳的価値の再評価を可能にしたのが価値概念の自然化であった。すなわち、特に中期以降のニーチェは価値の超越性を否定して、それを自然的事実（特に生理学的事実）から説明しようとし、その考察が後の価値転換の思想へと結実したのである。価値の自然化によって道徳的価値の普遍的規範性は否定され（こうした普遍性要求は、科学的法則と同等の道徳的法則が存在するとみならず、いわば「誤った科学主義」と言えよう）、道徳はあくまでも、或る特定のタイプの生（人間）にとつてのみ価値あるものにすぎないことが暴き出される。様々なタイプの価値に適合する様々なタイプの人間がいることを明らかにする営為、それがニーチェの「道徳の類型学」であるが、それに関して科学主義という観点から指摘すべきは、以下の点である。すなわち、この類型学自体は科学的に可能なものであるが、価値転換の方向づけ、換言すれば、いかなる価値を新たに創造すべきかという点については、ニーチェの価値が前提されているということである。要するに、価値の自然化によってあらゆる価値の価値転換の可能性が開かれたわけであるが、価値転換の試み自体は最終的には特定の実質倫理的価値へのコミットメントに支えられていたということである。このように価値の領域におけるニーチェの科学主義の位置づけは、単純な規定を拒絶する複雑さを具えている。

(3)「芸術」の領域に関してまず指摘すべきは、ニーチェ美学と自然科学の真理性との親和性をめぐる議論の錯綜状態である。ネハマス（Alexander Nehamas, *Nietzsche: Life as Literature*）は、ニーチェに自然主義的な言説があることを認めるものの、自然科学ではなく文学の構造によって世界を読む「芸術モデル主義」を主張するが、ライター（Brian Leiter, *Nietzsche and Aestheticism*）は、ニーチェの方法論を自然主義と見るほうがニーチェ思想の整合性の点で正当だとしてネハマスの誤読を指摘する。この対立を調停するかたちで「自然化された芸術モデル主義」という観点からニーチェの自然主義を理解するメイヤー（Matthew Meyer, *Nietzsche's Naturalized Aestheticism*）によれば、ニーチェのプロジェクトは自然主義の成果を利用しつつも、そこから受け継いだ「力」の概念に「内なる意志」を帰した「権力への意志」によって自然を「人間化（擬人化）」するものであり、その意味で自然科学と世界の美的創造というニーチェの思想とは接合可能である、とされる。以上のような先行研究に対して本研究は、自然科学の概念や方法あるいは成果を取り込もうとしたことでニーチェの美学や芸術観が固有の魅力を獲得したことを、その自然科学理解に一定の限界を見いだしつつ認めるという暫定的な結論に至った。すなわち、ニーチェにとって生理学や生物学は力や性についてのインスピレーションの源泉であったが、同時にそれは実証性に欠ける「疑似ダーヴィニズム」に留まるものか、あるいは神話や道徳から距離を取るための装置であるか、である。いずれにせよ、それがニーチェ哲学において一定の役割を得ているとしても、自然科学こそが芸術や美的体験を革新したとまでは結論できない。また、自然科学に対するニーチェの言説は一貫性に欠けるが、むしろそれは独断論を避けようとするニーチェの立場を明確化するための有効な装置なのかもしれない。

本研究の成果は以上のようにまとめられるが、以下ではこうした成果の研究動向上の位置づけとインパクト、および今後の展望について記したい。まず前者についてであるが、本報告「1. 研究開始当初の背景」でも述べたように、反科学主義的ポストモダンと科学主義的分析哲学の対立という現代哲学の構図を反映するかたちで、構成主義を主軸にしたポストモダンのニーチェ解釈がニーチェの名のもとに科学批判を遂行する一方で、自然主義的ニーチェ解釈陣営はポストモダンのニーチェ解釈を目の敵のように批判するという現況にあって、本研究は、ニーチェをバトルフィールドとしたそうした（反科学主義 vs 科学主義）という二項対立からは距離を取り、領域ごとに多様な角度から、しかも正面から丹念にニーチェにおける反科学主義と科学主義の可能性を探求し、その複層的な関係を示したものであり、従来の二項対立的解釈枠組みの限界

を明示したという点で類例はなく、今後の同種の研究に対して有効な参照枠を提示したと言ってよいであろう。

最後に今後の展望について、まずはニーチェの内在的解釈という点から述べる。本研究は、当該課題に関する上記のような成果にもかかわらず、問題とニーチェのテキスト自体の複雑さゆえに、当該課題のすべてをくまなく探索したとまでは言えず、それゆえ上記成果のさらなる深化・広範化が必要である。また、今回の研究で領域ごとに得られた知見を総合するという困難な課題も残されたままであり、その遂行が求められる。次に現代哲学的問題系との関係という点から今後の展望を述べる。現代哲学、特に科学主義や物理主義との関係をめぐってそれ自体が多様かつ複雑に展開している哲学的自然主義との〈対話／対決〉という課題は、今回の研究では、一筋縄ではいかないニーチェのテキストの読解に多くの時間を取られ、十分に探求を深めることができなかった。この点を推し進め、哲学的自然主義を相対化する視点としてニーチェのテキストがどこまで有効なのかを解明することは、本研究の次の展開として不可欠かつ不可避なものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 齋藤智志	4. 巻 第702号
2. 論文標題 ショーペンハウアーの 批判史学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『理想』	6. 最初と最後の頁 14～24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤貴雄	4. 巻 第33号
2. 論文標題 ショーペンハウアー哲学の受容とその時代	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『実存思想論集』	6. 最初と最後の頁 33～66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤貴雄	4. 巻 第23号
2. 論文標題 ショーペンハウアー倫理学の超越論哲学的構造	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『ショーペンハウアー研究』	6. 最初と最後の頁 141～151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹内綱史	4. 巻 第23号
2. 論文標題 「神は死んだ」のか？ ニーチェにおける宗教と科学	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『ショーペンハウアー研究』	6. 最初と最後の頁 50～63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹内綱史	4. 巻 第49号
2. 論文標題 超越者なき自己超越 ニーチェにおける超越と倫理	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『倫理学研究』	6. 最初と最後の頁 20～35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 上野山晃弘	4. 巻 第23号
2. 論文標題 ショーペンハウアーの動物倫理再考 動物倫理から生命の倫理へ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『ショーペンハウアー研究』	6. 最初と最後の頁 127～140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤智志	4. 巻 33
2. 論文標題 ショーペンハウアー 哲学は意志形而上学か？	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 実存思想協会編『実存思想論集』	6. 最初と最後の頁 61～79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本恵子	4. 巻 紀要別巻
2. 論文標題 畠山直哉の写真と震災以後の美学	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 早稲田大学感性領域総合研究所編『震災と感性』	6. 最初と最後の頁 4-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計32件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 齋藤智志
2. 発表標題 ショーペンハウアーにおける超越論哲学と自然哲学
3. 学会等名 ニーチェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで （日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究（C）課題番号17K02183）第2回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤智志
2. 発表標題 ショーペンハウアーの自然科学批判（承前）（ワークショップ「科学と生」提題）
3. 学会等名 ニーチェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで （日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究（C）課題番号17K02183）第2回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤智志
2. 発表標題 ショーペンハウアーとニーチェ 意志の否定か、意志の肯定か？
3. 学会等名 ニーチェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで （日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究（C）課題番号17K02183）第2回研究会とむつ市市民講座の共催
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋陽一郎
2. 発表標題 ショーペンハウアーにおける自然哲学の諸問題
3. 学会等名 ニーチェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで （日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究（C）課題番号17K02183）第2回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋陽一郎
2. 発表標題 主著発刊200周年記念企画 『意志と表象としての世界』を観る、読む、語り合う
3. 学会等名 日本ショーペンハウアー協会第31回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊藤貴雄
2. 発表標題 The Transcendental-philosophical Structure of Schopenhauer 's Ethical Theory
3. 学会等名 第24回世界哲学会議（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊藤貴雄
2. 発表標題 意志のアナロジーに関する一考察
3. 学会等名 ニーチェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで （日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究（C）課題番号17K02183）第2回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊藤貴雄
2. 発表標題 Der Staat als Wille und Vorstellung
3. 学会等名 ショーペンハウアー研究の世紀へ 主著刊行200周年を機縁とした国際共同研究・第2回国際会議「『意志と表象としての世界』を読み直す 全体構想、各巻主題、そして ショーペンハウアーと「東洋」」（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹内綱史
2. 発表標題 Nietzsche 's Critique of Schopenhauer ' s Morality of Compassion
3. 学会等名 The XXIV World Congress of Philosophy (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹内綱史
2. 発表標題 ニーチェによるショーペンハウアーの共苦道德批判
3. 学会等名 ニーチェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで (日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究 (C) 課題番号17K02183) 第2回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹内綱史
2. 発表標題 Die "Kritische Historie" in der Historienschrift als die erste Methodologie der Philosophie Nietzsches
3. 学会等名 29. Internationaler Nietzsche-Kongress in Naumburg (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹内綱史
2. 発表標題 超越者なき自己超越 ニーチェにおける超越と倫理
3. 学会等名 関西哲学会2018年度大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹内綱史
2. 発表標題 現代ニーチェ研究から見たヤスパースのニーチェ解釈
3. 学会等名 日本ヤスパース協会第35回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 本郷朝香
2. 発表標題 ニーチェの遠近法における「見ること」と「見られること」
3. 学会等名 お茶の水女子大学哲学倫理学研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 関塚正嗣
2. 発表標題 ニーチェの真理論と科学批判 命令としての矛盾律
3. 学会等名 ニーチェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで (日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究(C)課題番号17K02183) 第2回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 梅田孝太
2. 発表標題 ニーチェの力の思想 生成としての自然理解から見たニーチェの科学主義
3. 学会等名 ニーチェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで (日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究(C)課題番号17K02183) 第2回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 梅田孝太
2. 発表標題 ニージェ『悦ばしき科学』における科学と芸術(ワークショップ「科学と生」提題)
3. 学会等名 ニージェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで (日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究(C)課題番号17K02183)第2回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木完成
2. 発表標題 ニージェとクーン 可謬性を前提とし、「反証」に基づかない「真理」
3. 学会等名 ニージェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで (日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究(C)課題番号17K02183)第2回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤智志
2. 発表標題 ショーペンハウアーの自然科学批判
3. 学会等名 ニージェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで (日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究(C)課題番号17K02183)第1回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊藤貴雄
2. 発表標題 ショーペンハウアー哲学の受容とその時代 世紀末から世界大戦、そして現代へ
3. 学会等名 実存思想協会第33回大会(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 上野山晃弘
2. 発表標題 ショーペンハウアーの動物倫理再考
3. 学会等名 日本ショーペンハウアー協会第30回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 上野山晃弘
2. 発表標題 近代批判としての自然哲学 ショーペンハウアーの動物倫理再考
3. 学会等名 ニーチェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで (日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究(C) 課題番号17K02183) 第1回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋陽一郎
2. 発表標題 Idee und Zeit Die Probleme der Ideenlehre beim jungen Schopenhauer
3. 学会等名 ショーペンハウアー研究の新世紀へ 主著刊行200周年を機縁とした国際共同研究 (日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究(B) 課題番号17H02281) 第1回国際会議(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 竹内綱史
2. 発表標題 「神は死んだ」のか? ニーチェにおける宗教と科学
3. 学会等名 日本ショーペンハウアー協会第30回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 竹内綱史
2. 発表標題 Was bedeutet Nietzsches Kritik am Christentum in der postsaekularen Gesellschaft?
3. 学会等名 Nietzsche-Gesellschaft Internationaler Kongress in Naumburg (Saale) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 竹内綱史
2. 発表標題 ニーチェにおける「自然主義的転回」の帰趨 第四『反時代的考察』から『人間的、あまりに人間的』へ
3. 学会等名 ニーチェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで (日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究(C)課題番号17K02183) 第1回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 竹内綱史
2. 発表標題 ショーペンハウアーとニーチェにおける「自然」と「意志」
3. 学会等名 日本ショーペンハウアー協会第27回ニーチェ・セミナー
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 梅田孝太
2. 発表標題 デリダの死刑論とニーチェ
3. 学会等名 慶應義塾大学学事振興資金助成シンポジウム(後援:慶應義塾大学教養研究センター、協賛:アムネスティ・インターナショナル日本、脱構築研究会、白水社)「デリダと死刑を考える」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 梅田孝太
2. 発表標題 ニーチェの自然科学観
3. 学会等名 ニーチェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで (日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究(C)課題番号17K02183) 第1回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岡村俊史
2. 発表標題 価値の価値を測ることはいかにして可能か? ニーチェにおける「価値」概念の分析を通して
3. 学会等名 ニーチェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで (日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究(C)課題番号17K02183) 第1回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 五郎丸仁美
2. 発表標題 自由と必然を巡る中期ニーチェの思考と科学主義
3. 学会等名 ニーチェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで (日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究(C)課題番号17K02183) 第1回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 本郷朝香
2. 発表標題 「自己分割する靈魂」としての英雄の悲劇
3. 学会等名 ニーチェにおける科学主義と反科学主義の再検討 ショーペンハウアーとの対比のなかで (日本学術振興会学術研究助成基金助成金・基盤研究(C)課題番号17K02183) 第1回研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 Volker Gerhardt, Beatrix Himmelmann, Gerald Hoedl, Sebastian Kaufmann, Dagmar Kiesel, Duncan Large, Enno Rudolph, Michael Schmidt-Salomon, Christoph Tuercke, Tsunafumi Takeuchiほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 De Gruyter	5. 総ページ数 500
3. 書名 Nietzsche und die Reformation	

1. 著者名 本郷朝香、田上孝一、金澤修、坂本邦暢、青木滋之、池田真治、木島泰三、小谷英生、武井徹也、白井雅人、東克明	4. 発行年 2018年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 331
3. 書名 原子論の可能性	

1. 著者名 高桑和巳、鶴飼哲、江島泰子、梅田孝太、増田一夫、郷原佳以、石塚 伸一	4. 発行年 2018年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 238
3. 書名 デリダと死刑を考える	

1. 著者名 山岡政紀、伊藤貴雄、蝶名林亮	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 280
3. 書名 『ヒューマニティーズの復興をめざして 人間学への招待』	

1. 著者名 Marco Brusotti, Michael Mcneal, Corinna Schubert and Herman Siemens, Tsunafumi Takeuchiその他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Walter de Gruyter	5. 総ページ数 450
3. 書名 European / Supra-european: Cultural Encounters in Nietzsche's Philosophy	

1. 著者名 伊藤邦武、中川明才、竹内綱史、佐々木隆治、神崎宣次、原田雅樹、小川仁志、三宅岳史、富澤かな、苅部直	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 世界哲学史 7	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>・バーナード・レジンスター著（岡村俊史、竹内綱史、新名隆志訳）『生の肯定 ニーチェによるニヒリズムの克服』、法政大学出版局、2020年。</p> <p>・ユルゲン・トラバント著（村井則夫、齋藤元紀、伊藤敦広監訳、梅田孝太、辻麻衣子共訳）『人文主義の言語思想 フンボルトの伝統』、岩波書店、2020年。</p>

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	関塚 正嗣 (Sekizuka Shoji) (00350851)	公立諏訪東京理科大学・共通・マネジメント教育センター・教授 (23604)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	上野山 晃弘 (Uenoyama Akihiro) (00440024)	日本大学・危機管理学部・講師 (32665)	
研究分担者	竹内 綱史 (Takeuchi Tsunafumi) (40547014)	龍谷大学・経営学部・准教授 (34316)	
研究分担者	鈴木 克成 (Suzuki Katsunari) (60279487)	青森中央学院大学・経営法学部・教授 (31106)	
研究分担者	山本 恵子 (Yamamoto Keiko) (70434248)	東京造形大学・造形学部・准教授 (32656)	
研究分担者	伊藤 貴雄 (Ito Takao) (70440237)	創価大学・文学部・教授 (32690)	
研究分担者	高橋 陽一郎 (Takahashi Yoichiro) (80333102)	日本大学・文理学部・教授 (32665)	
研究協力者	五郎丸 仁美 (Goromaru Hitomi)	多摩美術大学・非常勤講師	
研究協力者	岡村 俊史 (Okamura Toshifumi)	龍谷大学・非常勤講師	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	本郷 朝香 (Hongo Asaka)	立教大学・非常勤講師	
研究協力者	梅田 孝太 (Umeda Kota)	上智大学・非常勤講師	